町内の「ごみステーション」ルールやマナーはどうすれば守られるの？

What's 今さら聞けない地域活動の疑問・質問 まちづくり

2018年11月9日号掲載

私が聞いてきました！
探検隊メンバー
高見睦代さん

黒髪校区4町内自治会長
安藤邦夫さん

試行錯誤と地道な努力で美化を実現！

地域の身近な課題として取り上げられることが多い「ごみ問題」。特に、日々のごみ出しで使われる「ごみステーション」の美化は、どの地域でも苦労があり、工夫がなされています。

中央区黒髪校区4町内も、そうした地域の一つ。同町内は、大学生も多く住んでおり、以前からごみ出しマナーが問題になっていました。

「自治会のメンバーによる（ごみステーションの）清掃だけでは限界がある。根本的に改善するには、ごみ出しルールの周知が必要」と考えた同町内自治会長の安藤邦夫さん。6～7年前から違反ごみに違反内容を説明したステッカーを貼ったり、ルール徹底を呼び掛けるビラを配布したりするなどの啓発に取り組みました。また、大学や熊本市の北部クリーンセンターと連携し、学生らとごみステーションの巡回清掃などを行う「ごみゼロ・プロジェクト」を立ち上げ、ごみ出しの意識改革と町内環境の美化に努めてきました。

環境美化は安全・安心のまちづくりにもつながる

そうした地道な取り組みが功を奏し、最近では「違反ごみは激減し、以前とは見違えるほど町内がきれいになりました」（安藤さん）。

回収されなかった違反ごみが不衛生だったり、そうしたごみが歩道に散乱し歩行者を巻き込む事故につながったりと、ルール違反は思わぬ形で地域に影響を及ぼします。さらに安藤さんは、「地域の環境美化は、単に〝きれいにする〟ことが目的ではなく、地域の結束力を示し、不審者や悪徳業者などによる犯罪行為を未然に防ぐ効果もある」と力説します。

一朝一夕にはできない、ごみステーションの美化ですが、その効果は一石二鳥にも三鳥にもなるようです。

▲数年前の黒髪校区4町内のごみステーション。ルール違反のごみが、こんなに…（写真提供／黒髪校区4町内自治会）

◀"無法地帯"と化したごみステーションを清掃する地域の方々（写真提供／黒髪校区4町内自治会）

取り組みの成果で、ごみ出し日以外は写真のような状態が保たれています（写真提供／黒髪校区4町内自治会）

学生たちとごみステーションを巡回し、ごみ出しの現状を知るきっかけに（写真提供／黒髪校区4町内自治会）

黒髪校区4町内では資源物回収も！

今回取材した黒髪校区4町内では、ごみステーションの清掃だけでなく、資源物の回収にも力を注いでいます。毎月第2・4土曜の2回、同町内の自主防災クラブのメンバーを中心に町内をくまなく回り、各家庭から出された資源物（古紙、段ボール、アルミ缶など）を集めます。分類して業者に持ち込んで得たお金はクラブの活動資金に充て、これまでに防災器材等を収める倉庫や軽トラックなどを購入しました。

ちなみに、資源物回収で年間約100万円（市からの補助金を含む）を得る同町内の取り組みは、全国的にも注目を集めており、各地から視察に訪れるほど。"まち"をきれいにするだけでなく、ごみを資源として地域活動を活性化させる仕組み、ぜひ参考にしてください。

町内の公園に集められた資源物の量にびっくり！

黒髪校区4町内の自主防災クラブの皆さん

探検隊メンバーの取材メモ

町内のごみステーション美化のために努力された安藤会長らの行動力に頭が下がります。それが防犯や防災にもつながるというのも新しい発見でした。さらに、資源物回収で地域の活動資金を稼ぐなんてすごい！　私も月1回、ボランティア活動で資源物回収に取り組んでいるので参考にします。　**高見さん**

分別マナーは市民一人一人の意識向上から！

地域のごみステーションの管理・清掃は各町内自治会が担っており、地域の環境美化には欠かせない存在です。しかし、ルール違反のごみの対応には、どの町内も頭を悩ませており、市民一人一人の協力が欠かせません。ごみ出し日や分類がすぐに分かる熊本市の「ごみ分別アプリ」をダウンロードして、分別マナーの向上にご協力をお願いします。

ごみステーションに関するお問い合わせは
熊本市ごみ減量推進課☎096(328)2365

iOS版　android版

「校区社会福祉協議会」って地域での暮らしにどんな関わりがあるの？

What's 今さら聞けない地域活動の疑問・質問 まちづくり

2018年11月23日号掲載

私たちが聞いてきました！
探検隊メンバー（左から）
西島明美さん
久保恵美さん

◀▲「清水湧く湧く福祉まつり」には、毎年、地域の老若男女が参加。校区社協、自治会、民生委員が連携して「誘い隊」を結成し、閉じこもりがちな高齢者へ参加を呼び掛け、タクシーでの移動支援も行っています

▶毎月第2水曜に実施している健康講座では、健康に関する講話の後、ストレッチや嚥下（えんげ）体操などを実施。また、毎月第3日曜に行う「ふれあい音楽サロン」も人気です

地域の福祉課題に対応する〝コーディネーター〟

校区社協」は現在、熊本市内の全校区・地区に設置されている身近な組織ですが、私たちの日常生活で、その存在を意識することはあまりありません。各都道府県や市町村単位で設置されている社会福祉協議会は、地域に暮らす高齢者や障がい者をはじめ、すべての人が一人の人間として尊重され、住み慣れた地域で健康的に、安心して暮らせるように活動しています。小学校区単位で設置されている校区社協は、その〝最前線〟ともいえる位置付けで、住民に最も身近な立場で、地域の福祉課題の掘り起こしと解決に向けた調整役を果たしています。

清水校区では、高齢者を対象にした「いきいきサロン」などの事業のほかにも、子どもやその親世代を巻き込むなど、積極的な世代間交流を図り、地域福祉の充実に努めています。

そうした取り組みの一つが、毎年10月に同校区の自治協議会やまちづくり委員会と一緒に開催している「清水湧く湧く福祉まつり」です。会場となった清水小体育館のステージでは、校区内の幼・保育園、小・中学校の児童・生徒らが合唱や合奏を披露したほか、保護者らはバザーを行い、多くの地域住民でにぎわいました。

同校区社協会長の岡松さんは、「子どもは地域の宝。犯罪はもちろん、貧困などの問題から子どもたちを守るためにも、こうした機会に顔見知りになっておくことが重要」と、まつりの意義を強調します。また、同校区社協では、校区自治協等とも連携し、登下校中の子どもたちへのあいさつ運動も実施しています。

地域の多様な福祉ニーズにさまざまな機関・施設と連携

清水校区の高齢化率は29・6％と、熊本市の平均（26・4％）を大きく上回っています。「超高齢社会で多様化するニーズに対応していくためにも、地域のつなぎ役が必要だと感じています。行政や民生委員、ささえりあ、校区内の病院、福祉施設などとも協力して、適材適所でヒト・モノ・コトをつないでいきたい」と岡松さん。

現在、同校区社協で実施している「健康体操」「健康講座」では、理学療法士や各分野の専門家に講師を依頼。また、「長く楽しく続けてもらえるように」とパンフレットや修了証を作成するなど、〝地域のコーディネーター〟的役割を果たしています。

清水校区社会福祉協議会
会長 岡松宏泰さん

探検隊メンバーの取材メモ

「校区社協はコーディネーター役」という岡松会長の言葉が印象に残りました。地域で暮らすさまざまな人をつなぐ"架け橋"として、多様な活動に関与していることを知って、社協のイメージが変わりました。　**久保さん**

岡松会長が、地域の課題に対して諦めることなく、「今できること」を工夫しながら活動されているのに感動しました。「福祉まつり」は子どもや若い世代も多く参加していて、祭りを通した世代間交流が生まれていることに驚きました。　**西島さん**

社協の活動内容、岡松会長の思いや姿勢を知り、学びの多い時間となりました

「校区社会福祉協議会」とは
社会福祉協議会の理念を、より身近な「地域（校区）」で実践するネットワーク活動

熊本市では、地域自らが校区単位で社会福祉協議会を設立。住民同士が地域の生活・福祉課題を"自分事"として受け止め、「誰もが安心して共に暮らせる福祉のまちづくり」を目指しています。メンバーは、校区自治協議会や民生委員・児童委員、老人クラブ等と兼務している方が多く、互いに情報を持ち寄って活動しています。

校区ごとに設置されている「青少年健全育成協議会」って、どんなことをしている団体？

▲月1回、地域の防犯協会などと協力し、校区内の小中学校で行っているあいさつ運動の様子(写真提供／川上校区青少協)

▲北区の子ども保健課などと連携して10月に行っている「秋の彼岸花ロードハイキング」。親子連れなど250人以上が参加(写真提供／川上校区青少協)

▲8月の校区夏祭りは、すべての出店が青少協など、地域の各種団体の手作りで行われます(写真提供／川上校区青少協)

私が聞いてきました！
探検隊メンバー
池田史恵さん

川上校区
青少年健全育成協議会 事務局長
津地尚文さん

活動の最大の喜びは子どもたちの笑顔！

青少年健全育成協議会(青少協)。地域のさまざまな行事などの主催者として、名前を聞いたことがある人も多いでしょう。ただ、「何をしているか」を詳しく知っている人は少ないかもしれません。

「子どもたちの健全な育成や地域における社会参加、非行防止などのために活動しているのが青少協です」と川上校区青少協事務局長の津地さん。同校区青少協は、主催、共催や他団体が行う事業への参加など、さまざまな形で「子どもと大人が関わる活動」に取り組んでいます。校区内の小中学校の校門に立つ「あいさつ運動」をはじめ、校区夏祭りでの出店や北部中生徒との懇談会、親子ハイキングなど、内容も多彩。

「子どもたちが地域の中で安心して暮らし、健やかに育つためには、(地域の)大人たちと交流し、顔と名前を覚えてもらうことが大事」(津地さん)。そうした「場」をつくり、世代間のコミュニケーション強化を後押しするのが、青少協の重要な役割の一つです。

地元の良さを子どもに伝える役割も

津地さんが青少協の活動に携わるようになったのは、PTA活動を通じて子どもたちの成長する姿に触れ、地域とつながる機会が増えたことがきっかけ。

「行事やあいさつ運動で、子どもたちに声を掛けられたり、笑顔を見せてくれるのが何よりのやりがい。青少協が関わる行事に参加した彼らが大人になって、『地元に戻りたい』『地域のために何かしたい』と思ってくれれば」と、将来を見据えた活動の意義を説きます。

青少協に限らず、町内自治会をはじめとする地域の各種団体では近年、人材の確保・育成が課題となっていますが、「子どもを地域で見守り、育てる」ことを目的とする青少協の活動は、子育て世代である30～40代にとって関わりやすい地域活動の一つといえるかもしれません。

熱く盛り上がったインタビュー。最後は、津地さんから池田さんへ子育てのアドバイスも

子どもたちが発表する「青少年大会」は地域への“顔見せ”の場

昨年11月3日に「第28回ふれあいフェスタinほくぶ」の一環として、北区の北部中学校体育館で行われた「青少年大会」。川上校区青少協が関わる年間行事の中でも特に大きなイベントです。当日は、小中学生が描いた絵画などの展示のほか、「情熱ライブステージ」と銘打ったステージイベントも。大学生の吹奏楽や子どもたちのダンス、琴の演奏など、5組が日頃の成果を披露。川上校区を含む北部地区では、こうしたイベントが地域に子どもたちの顔を覚えてもらう場になっています。

▲北部地区の小中学生の作品展示も行われました

▲チアダンスや琴の演奏など、子どもたちの頑張りに大きな声援

探検隊メンバーの取材メモ

川上校区では、青少協単独ではなく、他団体とのヨコの連携を図りながら、「互いの負担は少なく効果は大きく」という考えの下に、さまざまな青少年の健全育成につながる取り組みをされているのが参考になりました。私の住む地域でも、「子ども達を地域と関わらせる仕掛け」を考えていきたいと思います！ **池田さん**

さまざまな活動を通じて地域の子どもたちの健全育成に貢献

熊本市には、現在90の校区・地区に青少年健全育成協議会(校区青少協)が結成されています。各校区青少協では、地域の各種団体や区役所等と連携し、青少年の健全な育成を図るためのイベントや声掛けといった、さまざまな活動に取り組んでいます。子どもを地域で見守り育てるという大きな役割を担っていて、地域には欠かせない団体です。

青少年健全育成協議会に関するお問い合わせは
各区役所の総務企画課まで

「熊本市地域コミュニティセンター」ってどんなところで、どんな役割を果たしているの？

▲楡木コミセンで行われている「紙バンドカゴ教室」の様子。参加者からは「出来上がった達成感はもちろん、雑談の中で悩みを打ち明けたり、現実を忘れて作業に没頭することで、ストレス発散になります」との声も

私たちが聞いてきました！
探検隊メンバー(左から)
緒方幸江さん
谷口祐三子さん、永田文許さん

住民がふれあい、連携を深める活動と交流の拠点

近年、地方分権の進展に伴い、これまで以上に住民による自主的かつ主体的な地域づくりが求められるようになっています。そうした流れを受け、まちづくりやボランティア活動、健康増進、生涯学習など、住民主体の地域づくり活動の拠点施設として整備が進められている「コミセン」。その一つが昨年4月に開設された「楡木コミセン」です。

「町内にある公民館や老人憩いの家は、施設の広さや設備の問題で活動内容が限定され、利用者はいつも決まった人になりがち。校区全体の人が集えるコミセン設置は、地域の悲願でした」と話す、楡木校区自治協議会会長の中武さん。

多彩なイベントを通じて親しみのある施設に

開設当初、楡木コミセン運営委員会では、「まずは施設のことを知ってもらおう」と月2～3回、回覧板を通じてコミセン情報を発信。さらに、足を運んでもらう機会を増やすため、フリーマーケットや歌謡祭、文化祭などのイベントを開催してきました。その結果、開設から約1年がたった現在、コミセンの稼働率は80%を超えています。

同コミセンで2週間に1度、「紙バンドカゴ教室(エコクラフト)」を開く檜室洋子さんは、「これまでは自宅でできる範囲で教えていましたが、コミセンを利用するようになり生徒さんも増えました。今では講師と生徒が連れ立ってお花見に行ったり、食事に行ったりと、交流の輪が広がりました」と笑顔で話します。

それでも、「まだまだ」と気を引き締めるのは、同コミセン運営委員会会長の那須さん。「男性の利用が少なく、世代や町内によっても利用頻度に差があります。誰もが利用できる場であることを周知し、幅広い世代が利用したくなる教室やイベントを企画していきます」

地域住民がつながり、絆を深める場としての役割を果たすだけでなく、講座への参加などを通して高齢者の引きこもり予防などにもひと役買っているコミセン。皆さんも、ぜひ自分の住む地域のコミセンをのぞいてみませんか。

▲▶楡木コミセンでは定期的にバラエティー豊かなイベントを実施。11月に開催した「文化祭」には200人以上が来場しました(写真提供／楡木コミセン)

(左から)
楡木校区自治協議会会長 中武邦安さん
楡木地域コミュニティセンター運営委員会会長 那須叡さん
同委員会副会長 浅井渉さん

探検隊メンバーの取材メモ

コミセンには、もう20年近く縁がありませんでしたが、楡木コミセンの運営に携わっている方々の情熱と、地域のためにいろいろと仕掛けていく行動力に感動しました。私も、いつかこんな活動に関りたいと思いました。 **緒方さん**

開設から8カ月にも関わらず、多くの教室が開かれていて驚きました。コミセンで久々の再会があったり、世代を超えた交流が始まったという話を聞き、地域づくり・人づくりに欠かせない「拠点」なんだと実感しました。 **谷口さん**

高齢者向けパソコン教室からベビーマッサージ教室まで、多くの講座が開講されており、地域の方たちで盛り上げて行こうという工夫を感じました。運営委員会の皆さんのチームワークが良く、利用してみたくなるコミセンでした。 **永田さん**

私たちが暮らす地域のコミセンも活用していきます！

地域の自主的・主体的なまちづくり活動の拠点に

熊本市地域コミュニティセンター(コミセン)は、住民主体の地域づくり活動を支援するための拠点施設です。各コミセンには、多目的ホールや会議室、和室、調理室があり、誰でも気軽に、安心して利用できるよう積極的にバリアフリー設備を取り入れています。また、16カ所には児童育成クラブも併設され、子どもの成長を地域で支えています。

熊本市地域コミュニティセンターに関するお問い合わせは
各区役所の総務企画課まで